

大正大学研究紀要に思う

第32代学長 小峰 彌彦

大正大学では多くの学術研究論文誌を刊行しているが、その中でも研究紀要は特別な意味がある。言うまでもなく紀要は大学の顔であり、ここに掲載された論文は大学の研究者の質を示していることになる。それだけに紀要に論文の掲載を許可されることは、研究者としての評価を得たことになる。厳しく審査される大学の紀要に研究成果を発表できることは、特に若手の研究者の願いであり、誇りであり、大きな目標であった。

私が研究論文を書き始めた時代は学会誌が今のように豊富ではなく、従って論文の掲載場所は限られていた。そのような環境の中で大正大学の紀要に書くことを許可されたことは、望外の喜びであった。最初の論文は「初期大乘における声聞と菩薩」であり、『大正大学研究紀要』の第65輯（昭和55年3月）に掲載された。その後、幸いにも新たに入手した未完写本『十住心論義批』の研究が認められ、『紀要』第68輯と第69輯に連続して載せることができた。第68輯のテーマは『十住心論義批』の研究——未刊写本『義批』の紹介並註釈——であり、第69輯には『十住心論義批』の研究2——未刊写本『義批』の紹介並註釈——を掲載することができたのである。

『紀要』第65輯の論文は、大学院時代から取り組んできた般若経を基本資料とした研究で、仏教学の範疇のものである。そして次の『十住心論義批』の研究は、真言学の領域に入る論文で新たな研究分野である。というのも私は当

初は仏教學を専攻し初期大乘仏教に興味を持ち、具体的には般若經を中心に研究を行っていた。しかし事情があり大学院修了後まもなく、真言学研究室の助手となることを命じられた。真言学の助手となつたからには、密教関係の研究をなさねばならないことは当然のことであつた。しかしそうはいつても研究は時間を擁するものであるから、現実にはそう簡単に方向転換できるものではなかつた。密教の何をどう研究すべきなのか、当初はまさに試行錯誤の連続であつた。自分としては密教研究の可能性を求め、体系的な考えがないまま無我夢中でつき進んでいった。そんな手探りの状態なかで取り組んだ一つの研究対象が、『十住心論義批』の写本研究であつた。今でこそ写本研究は多くの研究者が行っているが、その当時は写本を資料とした研究は真言学では行われておらず、写本の読み方に苦勞をしながらも、少しづつ研究を進めていった。結果としては、それまで行われていた真言学の研究の枠を広げた意味もあつたと思う。

また『十住心論義批』の著者である凝然は、南都に学び華嚴学を宗とする碩学であるが、それだけではなく『八宗綱要』を著したことから知られるように、諸宗を修めた僧として著名である。当時の仏教が論書として有名な『八宗綱要』は、凝然が木幡の上人真空より『十住心論』の講義を受けた後に著した著作である。『十住心論』は空海の大著であり、凝然の『十住心論義批』はその注釈書である。従つて『義批』の研究は単に写本研究のみならず、当時の諸宗の学問や密教の教学の一端を知る上でも貴重な文献であつた。しかし写本研究は論文とは別な評価をしなくてはならないので、論文誌に掲載するには難しい面もあつた。それにもかかわらず『大正大学研究紀要』に二度に亘つて掲載を許可されたことは、感謝に耐えないところである。

私にとつて『紀要』に掲載されたことは、新たな研究分野を広げられたこともあつて、その思いは今でも心に重く残っている。